

産婦人科・泌尿生殖器科

産科

病棟 東病棟 6F、7F / 西病棟 6F / 西病棟 3F (CCU)  
 外来 外来診療棟C 1F 連絡先 022-717-7746 (産科外来)  
 ホームページ <http://www.ob-gy.med.tohoku.ac.jp/>



科長  
齋藤 昌利 特命教授

主な対象疾患

- 切迫早産 ●切迫流産 ●妊娠高血圧症候群 ●前置胎盤 ●癒着胎盤 ●合併症妊娠 ●子宮内胎児発育遅延 ●弛緩出血
- 子宮内反症 ●産道血腫 ●重症妊娠悪阻 ●帝王切開術後合併症 ●妊娠糖尿病 ●血液型不適合妊娠 ●子宮頸管無力症
- HELLP症候群 ●羊水過多症 ●羊水過少症 ●一絨毛膜二羊膜性双胎 ●常位胎盤早期剥離 ●胎児骨系統疾患

診療内容

当科は三次医療機関・総合周産期母子医療センターとして、県内のいわゆるハイリスク妊娠、ハイリスク分娩症例を主に扱っています。その内訳疾患は、子宮内胎児発育遅延症例、合併症妊娠症例、前置胎盤症例、双胎などなど非常に多岐に渡りますが、専門他科と連携しながら、より良い妊娠・分娩を目指して診療を行っており、年間の分娩数は全国の国公立大学の中でもトップクラスの約850件となっています。また、その他にも県内の一次・二次医療機関から産後の弛緩出血症例をほぼ全例受け入れ、麻酔科・救急部・輸血部と連携しながら先進的かつ効率的な治療を行なっています。

日々の診療では、最新の超音波診断装置を用いて、胎児の形態評価のみならずより細かい胎児の心機能評価も行い、新生児科と密に連携を取りながらベストなタイミング、ベストな方法での分娩を突き詰めて診療しています。また、切迫早産の原因となる子宮内炎症の評価のために羊水内のサイトカイン測定などを行い、より厳格な診断基準の下、胎児の娩出時期の決定と愛護的な帝王切開術の施行に努めています。

このような日常診療の他に、県内の周産期救急搬送症例のコーディネーター業務も行なっており、一次・二次施設で発生した救急症例をどの病院にいつ搬送するのかといったコーディネートも行なっています。その連絡件数は年間約500件のほり、そのうち約200件を当院で受け入れています。

診療体制

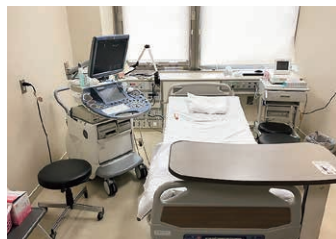
産科では外来専属医師3名、病棟専属医師12名を擁し日々の診療に当たっています。また、看護職員も約50名を擁し、昼夜問わず手厚い看護体制を整えつつ、いかなる緊急時にでも対応できるようにしています。また前述した周産期救急搬送コーディネーター事業専属の職員が2名、メディカルクラーク3名、クラーク2名を擁し、事務的な業務を主に行っています。さらに、専属の臨床心理士3名を擁し精神科と連携しながら、妊産婦さんのメンタルケアを積極的に行なっています。

得意分野

当科の得意分野は、子宮内胎児発育遅延症例です。最新の超音波機器を用いて、細かい血流評価を行うことによりその原因、現時点での心機能評価、今後の予想される経過などを常に考え、よりベストな分娩タイミング・方法、よりベストな新生児治療に繋がっています。また、産後の大量出血症例も我々が担う専門分野です。搬送依頼の電話を受けた瞬間から機能的かつ合理的な治療チームを作り、迅速な治療方針の決定と同時に、麻酔科・救急部・輸血部との連携をはかり、母体への負担が少なく回復の早い診療を心がけています。



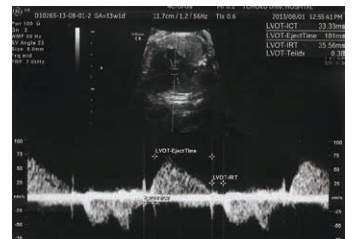
処置室1  
経腹超音波・経腔超音波診断装置を有する広く明るい処置室です



処置室2  
最新の超音波診断装置を有する処置室です



分娩室  
緊急手術にも対応可能な分娩室です



超音波検査による血流評価  
超音波診断装置を用いて胎児の心機能を詳細に評価しています

ご紹介いただく際の留意事項

■緊急性が考慮される症例の場合は、必ずご紹介前に当科外来にご一報ください。